若い世代の韓国華僑の言語教育・言語使用状況

「韓国漢城華僑中学」の言語教育と中等部生徒のリテラシー状況を中心に

王 恩美

1. はじめに

韓国華僑が朝鮮半島に移住し始めたのは19世紀末期であるが、主な定着時期が植民地時代であったため、現在、中・高年層の韓国華僑は第一・二世代、若い世代は第三・四世代になる場合が多い。

韓国華僑は民族教育に非常に熱心であり、その中国語能力は民族教育に支えられた面も大きかった。2002年現在、韓国華僑の人口は、21,629人であるが[1]、2001年の統計によると、韓国には華僑小学校が27校、中高一貫の華僑中学が4校と、非常に多くの華僑学校が存在している。その華僑学校の教育課程は中華民国（台湾）国内の課程基準に準拠しており、中国語中心となっている。

しかし、韓国華僑の中国語能力は世代によって、大きな違いが見られる。年齢が若いほど中国語能力は低い。40才以上の韓国華僑は中国語能力が韓国語能力より高い場合が多い。20才から30才の華僑は中国語能力が優位の人もいれば、韓国語が優位な人もいる。しかし、20才以下の華僑のほとんどは韓国語能力が中国語能力をはるかに上回っている。

韓国華僑学校の教育は戦後直後から現在まで、中華民国の教育課程に準拠し、ずっと中国語中心の教育を行ってきた。しかし、韓国華僑の中国語能力は徐々に衰えてきている。中国語中心の教育が韓国華僑の中国語能力を維持するための一つの基礎になっているのは確かであるが、それのみが中国語維持の条件ではないことは明らかである。

本稿の目的は、「韓国漢城華僑中学」の中等部を例として、20才以下の若い世代の韓国華僑の言語教育と言語使用状況を明らかにすることにある。具体的には、「韓国漢城華僑中学」で行われている中国語・韓国語の教育内容と、中等部生徒の中国語・韓国語のリテラシー状況を考察する。これらに関する考察は、主に筆者の実地調査に基づいている。筆者は2004年9月、同校を訪問し、孫樹義校長・蕭相譲教務主任・譚金霞国文教師・権相基韓国語教師に対しインタビューを行い、同校の中国語と韓国語の教育状況を調査した。また、教育状況をより鮮明にするために、統計などの学校内部資料を利用した。さらに、中等部生徒のリテラシー状況を明らかにするために、訪問の際入手した中国語と韓国語作文を分析材料とした。

1990年代半ば以降、韓国華僑社会においては全体的に「韓国化」が進んでいる中、最もそのスピードが早いのが若い世代である。20才以下の韓国華僑の言語状況を理解することによって、近年の韓国華僑社会で進んでいる「韓国化」の一面を浮き彫りにすることができると思われる。

2. 「韓国漢城華僑中学」の構成

まず、本論に先立ち「韓国漢城華僑中学」の歴史及び教師と生徒の状況を紹介することにしたい。

2.1. 学校の歩み

「韓国漢城華僑中学」は中等部と高等部に分かれている。同校が創立されたのは、1948年9月であり、中等部のみのスタートであった。当時の校名は「漢城華僑初級中学」であった。最初はソウルの水標洞にある華僑小学校の教室を借りて生徒を募集し、中1・2年の2クラスを設け、授業を開始した。翌年、中華民国大使館の所有地である明洞に校舎を建築した。その後、1950年、朝鮮戦争が勃発し、華僑が南に避難するにつれ、同校も釜山に移り、釜山領事館内で大使館や米軍の援助を得て、授業を続けた。朝鮮戦争が終り、1954年同校はソウルに戻ったが、校舎が戦争で破壊されたため、臨時に漢城華僑小学の教室を借りて授業を再開した。それと同時に同校の理事会が初めて設けられ、建校委員会も設立された。同年、学校の名を現在の「韓国漢城華僑中学」に変更し、1955年9月からは、高等部が増設された。建校委員会による募金と大使館・僑務委員会・中国大陸災胞救済総会の援助を得て、1955年12月には校舎が建築された。その位置はソウル明洞にあり、現在の漢城華僑小学のある場所である。その後、「韓国漢城華僑中学」は、1954年に制定された中華民国の「僑民学校規程」に従い、1956年6月に僑務委員会に登録された。

華僑学校を増設しようという華僑社会の要望に応じ、1968年、大使館が延禧洞に所有する土地を提供し、建築費の一部を援助することによって、新しく校舎が建てられた。同校は明洞の校舎を漢城華僑小学に譲り、新しく建てられた延禧洞の校舎に移り、現在に至っている[2]。

「韓国漢城華僑中学」は1970年代に至るまで、韓国政府から一切の干渉を受けず、法的な根拠も一切なかった。しかし、1970年代にはいると、韓国では「国籍のある教育」が強調され、外国人学校に就学している韓国人生徒への規制が強化された。1977年12月、韓国政府は「出入国管理法」を改定し、各外国人学校が外国人団体として登録するよう命じた。韓国政府は法的に管理することによって、韓国人生徒の外国人学校への就学を防ごうとした。こうして、同校は1978年8月に、外国人団体として登録した。その後、1999年2月、韓国の経済危機を契機に、外国人の投資を誘致するため、外国人団体の登録制度は廃棄された。同年3月、韓国教育部は各外国人学校に対して、「各種学校」として認可を受けることを命じ、同年9月に認可された。

2.2. 学校の教師と生徒

「韓国漢城華僑中学」の教師の多くは、韓国華僑である。同校は、中等学校と高等学校の教育が一貫して行われているため、〈表1〉の教師の統計は中等部と高等部を合わせたものである。2000年度の統計によると、54名の教師のうち40名が韓国華僑であり、全体の74.1%を占めている。2001年には45名、78.9%まで増加したが、2004年には人数は減少したものの、割合は84.8%と増加した。しかし、韓国人教師は25.9%から17.0%と減少傾向にある。

表1　韓国漢城華僑中学の教師の国籍　（単位：人）

年度	中華民国国籍（韓国華僑）	韓国国籍	合計
2000	40（74.1%）	14（25.9%）	54
2001	45（78.9%）	12（21.1%）	57
2004	39（84.8%）	8（17.0%）	47

出所：2000年：韓国漢城華僑中学教務処「韓国漢城華僑中学教職員一覧表」（2000年8月）（中国語資料、2001年8月、筆者が同校を訪問し入手）
出所：2001年：中華民国僑務委員会の調査資料表「海外僑校、中文学校（班）現況資料表」（2001年4月25日作成）（中国語資料、2001年8月、筆者が同校を訪問し入手）
出所：2004年：譚道経韓国語教師の提供資料（韓国語資料、2004年9月、筆者が同校を訪問し入手）

「韓国漢城華僑中学」の生徒もほとんど韓国華僑である。〈表2〉もまた、中等部と高等部を合わせた統計であるが、そこで示されているように、2004年現在、93.7%が韓国華僑である[3]。また、「韓国漢城華僑中学」の生徒が2002年以降多様化していることが見て取れる。2000年までは、韓国華僑のほかには、韓国人生徒のみが就学していた（1986年の「その他」については注4を参照）[4]。しかし、2002年以降は、中華人民共和国や日本・アメリカ・マレーシア・タイ国籍の生徒も少数でありながら、同校に就学するようになった。これらの国の生徒もまた、華僑や華人という中国系の生徒であるということが特徴であるといえる。

表2　韓国漢城華僑中学の生徒の国籍

年度	中華民国（韓国華僑）	中華民国（台湾）	中華人民共和国	香港	韓国	日本	アメリカ	マレーシア	タイ	その他	計
1978	2,305（97.9%）	-	-	-	49	-	-	-	-	-	2,354
1986	1,174（97.5%）	-	-	-	-	-	-	-	-	30	1,204
2000	843（99.4%）	-	-	-	5	-	-	-	-	-	848
2002	758（96.2%）	-	14	-	12	1	1	1	1	-	788
2004	591（93.7%）	1	23	2	11	-	1	1	1	-	631

出所：1978年：『韓国漢城華僑中学概況』1978年6月、13頁。
1986年：『第七十五学年度第二学期教職員及学生状況一覧表』1986年2月、9頁。
2000年：『韓国漢城華僑中学第八十九学年度概況』2001年3月、26頁。
2002年：韓国漢城華僑中学教務処「韓国漢城華僑中学学生国籍調査一覧表」（2002年7月15日）（2002年8月、筆者が同校を訪問し入手）
2004年：韓国漢城華僑中学教務処「韓国漢城華僑中学学生国籍調査一覧表」（2004年9月）（2004年9月、筆者が同校を訪問し入手）
註：以上の資料はすべて中国語である。

他国からの生徒が増加する一方、2000年から韓国人生徒は減少している。その上、2000年以前と以後の韓国人生徒は、その質を異にしている。というのは、1999年に華僑学校を含めた外国人学校が各種学校として再編成されると同時に、外国人学校の入学資格条件が発表された。その内容は、学校の設立者の自国民、同様の言語を使用する外国人、外国系（混血）の韓国国籍者、外国市民権を所持する韓国国籍者、海外に5年以上の居住経験を持つ韓国国籍者、という資格をもつ者に限って外国人学校への就学を許可するものであった。従って、2000年以前は、一般の韓国人生徒であったが、それ以降は上述した条件を備えた韓国人に限定されたのである。

〈表2〉でさらに目を引くのは、生徒数が減少しつつあることである。「韓国漢城華僑中学」の場合、1974年度の生徒数が最も多く、中等部と高等部を合わせ2,826人が就学していた[5]。しかし、それ以降徐々に減少し、1978年には2,354人、1986年には1,204人、2000年には848人まで縮小した[6]。2004年現在は、中等部が297人、高等部が334人と合わせて631人が就学している[7]。

3. 「韓国漢城華僑中学」の中国語・韓国語教育

「韓国漢城華僑中学」は主に華僑教師と華僑生徒によって構成されているが、以下では、「韓国漢城華僑中学」の言語教育、つまり、中国語と韓国語の教育がどのようなカリキュラムで、どのように行われているのかを中等部と高等部に分けて考察する[8]。

3.1. 中等部の中国語・韓国語教育

「韓国漢城華僑中学」が創立されたのは1948年であるが、創立当時から中華民国国内の教育課程に準拠してカリキュラムが編成されたと思われる。張兆理によると「韓国漢城華僑中学」は、1957年の時点ではすでに「韓国語」一科目を除けば、中華民国国内と授業編成がほぼ同じであったという[9]。

2004年現在も同校の教育課程は中華民国国内に準拠しており、中等部の場合は、〈表3〉のように「韓国語」一科目を除けば、依然として中華民国国内の授業科目とほぼ同じである。教科書に関しても、「韓国語」以外の科目は中華民国国内の教科書をそのまま使用している。

表3 韓国漢城華僑中学の中等部カリキュラム（2004. 9現在）

科目	1年	2年	3年
公民	2	2	2
国文	6	6	6
数学	5	5	5
英語	5	4	5
[redacted]			
歴史	3 2	3 2	3 2
地理	2	2	2
生物	3		
健康教育	2		
理化		4	4
地球科学			1
英文文法		2	2
電算	1	1	
音楽	1	1	1
美術	1	1	1
体育	1	1	1
補導活動	1	1	1
合計	35	35	36

韓国語

出所：「韓国漢城華僑中学」の教務処の提供資料（中国語資料、2004年9月、筆者が同校を訪問し入手）
註1：1時間が50分である。
註2：[redacted]は、韓国語教科書を使用する科目。

「韓国漢城華僑中学」中等部の言語教育に関しては、〈表3〉のカリキュラムの編成から理解できるように、中国語教育が中心となっている。同校の教師のなかで、華僑が大多数を占めているのは、こうしたカリキュラムの編成により、中国語のできる教師を必要としているからである。

「韓国漢城華僑中学」中等部のこうした中国語中心の教育は、初等教育を引きついだものである。華僑小学校も華僑中学の中等部同様、週1時間の「韓国語」授業以外には、すべて中華民国の教科書を使用し、華僑教師によって中国語の授業が行われている。

中国語中心の教育を行っているにもかかわらず、生徒の中国語能力はそれほど高くない。現在の華僑生徒の中国語の話す・読む・書く能力は徐々に衰えてきている。華僑教師によると、華僑小学校6年を卒業しても、中国語をよく理解できない生徒もおり、指導に困っているという[10]。中国語で授業を行う科目で、中国語のみで説明し、生徒が理解できない場合には、韓国語の単語を使って説明することもある。例えば、「巷子（xiang zi：路地）」を中国語で説明して分からない場合は、韓国語の「골목（golmok）」と同じ意味であると教える。特に、地理などの科目は地名を中国語で説明すると理解が遅く、韓国語で地名を教えてから説明することが多いという[11]。

週3時間のみの「韓国語」の授業は主に韓国人の教師が担当しており、韓国語によって授業が行われている。中等部の韓国語教材に関しては、韓国語を担当している権相基教師によると、該当学年より一年低い韓国教科書から内容を選び、編集して使っているという[12]。つまり、中学1年の教科書は、韓国小学校6年の教科書から、中学2年は韓国中学1年の教科書から、内容を選択しているのである。その主な理由は、小学校での韓国語の授業時間が少ないため、華僑生徒の韓国語のレベルに合わせるためであるという。

「韓国語」授業の内容は、読み書きに重点をおいている。現在、華僑生徒の会話能力は、韓国人と変わらず、外に出た場合自ら華僑であると言わない限り、韓国人と区別がつかないほどである。しかし、読む能力、特に書く能力は同じ学年の韓国人生徒のレベルに達していない生徒が多いため、作文や日記を書くなどして書く能力の向上に力を入れている[13]。

3.2. 高等部の中国語・韓国語教育

「韓国漢城華僑中学」の高等部1年までは中華民国国内に準拠した教育課程になっており、中国語中心の教育が続けられる（〈表4〉参照）。「韓国語」の授業も

表4　韓国漢城華僑中学の高等部カリキュラム（2004, 9現在）

学年／科目	I年	2年				3年					
		帰国進学		韓国進学		帰国進学			韓国進学		
		文	理	文	理	文	理(甲)	理(丙)	文	理(甲)	理(丙)
公民	2	1	1	6	6	1	1	1			
国文	6	6	6	6	6	6	6	6			
数学	6	6	6			6 8	9	9			
英語	6	6	6			6 6	6	6			
韓国語											
歷史	3	3+3	3	2	2	6					
地理	3	3	2			6					
生物	2		3			3		6			
化学			3			3	6	6			
物理			3			3	6	2			
基礎理化	2										
英文作文						2	2	2			
韓国歷史					2			3			
韓国地理				2	2			3			
韓国社会								3			
国学									4	4	4
電算		2	2	2	2						
音楽	1	1		1							
美術	1	1		1							
体育	1	1		1	1	1			1		
合計	36	33	37	35	36	36	36	38	36	37	39

出所：「韓国漢城華僑中学」の教務処の提供資料（中国語資料、2004年9月、筆者が同校を訪問し入手）
註1：1時間が50分である。
註2：■■■は、韓国語教科書を使用する科目。

依然として3時間のみである。しかし、その教材は中等部と異なって、該当学年の韓国教科書から編集して使用している。つまり、高校1年は同じく韓国の高校1年の教科書を編集して使っているのである。

高校2年になると生徒の進路によって、受ける授業内容は大きく異なってくる。台湾の大学に進学する生徒は、「帰国進学」クラスへ、韓国の大学に進学する生徒は「韓国進学」クラスへ進む。「帰国進学」クラスの生徒は、依然として「韓国語」は3時間のみであり、そのほかは中国語の教科書を使用し、中国語中心の教育を受ける。高校3年になると、「帰国進学」クラスの「韓国語」の授業はなくなり、すべて中国語の教科書を使用する授業に変わり、中国語の授業のみになる。

「韓国進学」クラスを選択した生徒は、韓国語の授業が増加し、中国語の授業

表5　高等部卒業生の台湾にある大学への進学率

年度	卒業生	台湾の大学進学者	割合
1986	188	115	61.17%
1987	219	81	36.99%
1988	198	96	48.48%
1989	224	54	24.11%
1992	172	63	36.63%
1993	154	62	40.26%
1994	137	67	48.91%
1995	125	48	38.40%
1996	142	53	37.32%
1997	170	43	25.29%
1998	179	54	30.17%
1999	188	51	27.13%
2000	177	40	22.60%
2002	138	40	28.99%
2003	135	22	16.30%

出所：1986年～1989年：金基弘「在韓華僑의 Ethnicity 에 關한 硏究── 在韓華僑의 適応過程에 대한 事例를 중심으로」、高麗大學校碩士論文、1995年、61頁。
1992年～2003年：卒業生の統計は、韓国漢城華僑中学「漢城華僑中学歷年畢業人数統計表（高中部）」『韓国漢城華僑中学第九十三学年度概況』、2004年、27頁により作成。進学統計に関しては、1992年~1999年は教務処の各年進学者名簿により、2000年～2003年は譚道経韓国語教師の統計に基づいて作成。
註：1992年～1999年の進学者名簿は、2000年8月、筆者が韓国漢城華僑中学を訪問し入手。
2000年～2003年の進学者統計は、2004年9月、筆者が韓国漢城華僑中学を訪問し入手。

は減少する。高校2年の「韓国進学」クラスは、「公民」「国文」は中華民国の教科書を使用しているが、それ以外の授業は韓国の教科書を使用している。たとえば、「生物」「化学」「物理」「韓国社会」「韓国歷史」「韓国地理」は、教科書を編集することなくそのまま韓国の教科書を使用する。高校3年になると、「韓国進学」クラスの韓国語の授業はさらに増加する。「国学」（四書五経をはじめ清までの中国の古典文学について学ぶ科目）4時間以外には、すべて韓国の教科書を使用する科目になり、韓国語の授業が中心になる。しかし、「韓国漢城華僑中学」では韓国人の教師が少ないため、「韓国進学」クラスの韓国語教科書を使用する科目をすべて、韓国人教師が担当することは難しいという。華僑教師がそれらの科目を担当することも多く、韓国語がよくできない教師は中国語を混用して授業を行っている[14]。

現在、「韓国漢城華僑中学」では、高校2年と3年の「韓国進学」クラスは、それぞれ2クラス、「帰国進学」クラスはそれぞれ1クラスで運営されている。こ

れは韓国の大学への進学希望者がより多いためであるが、近年「韓国漢城華僑中学」高等部の卒業生の進学先を見てみると、韓国の大学に進学する生徒が年を追うことに増加している。「韓国漢城華僑中学」の高等部卒業生の韓国の大学進学者数に関しては、正確な統計がないため、台湾の大学への進学者統計がその手がかりになると思われる（〈表5〉参照）[15]。むろん、台湾の大学へ進学しなかった卒業生がすべて韓国の大学へ進学するわけではない。就職する者もいれば、アメリカなどに留学する者もいる。しかし、韓国華僑の大学進学率は高く、卒業生の中で台湾の大学に進学した者を除くと、概ね韓国の大学への進学者になると思われる。

〈表5〉によると、台湾大学への進学率が1986年には61.17%に達したが、年を追うことに減少し、2003年には16.3%まで減少している。これは、韓国の大学に進学する生徒の増加を意味する。

このように、韓国の大学への進学希望者が増加したため、現在「韓国漢城華僑中学」の高等部では、韓国語教育を重視するようになってきており、韓国語中心の教育を受ける華僑生徒がより多くなっている。

4. 中等部生徒の韓国語・中国語のリテラシー状況

前述したように「韓国漢城華僑中学」は高校1年までは、中国語中心の教育を行っている。しかし、生徒の韓国語能力の方が中国語能力より高いように思われる。この章では、主に中等部の生徒の作文を分析し、韓国語と中国語のリテラシー状況を明らかにしたい。こうすることによって、華僑生徒の韓国語能力と中国語能力の実態が明らかになり、韓国華僑の若い世代（20才以下）の韓国語の「母語化」の程度が顕示できると考えられる。分析対象とした作文は、中国語が21本、韓国語が66本と合計87本である[16]。中国語作文21本のうち、中1が11本、中2が10本である。韓国語はすべて中2の作文である。これらの作文は筆者が2004年9月、同校を訪問し、入手したものである。中国語の作文は2週間に一回2時間程度で、「国文」の授業中に行う。「韓国語」の授業は週3時間と少ないため、作文に当てられる時間は月一回1時間程度である。

ちなみに、「韓国漢城華僑中学」の教育体制は中華民国に準拠しているため、授業中教師と生徒が使う文字は、すべて「繁体字」である。

筆者はまず、生徒が韓国語と中国語を書くときにどのような問題が生じているか比較してみた。その結果、中国語を書くときには韓国語に影響され、また、韓国語を書くときには中国語から影響を受けていた。しかし、中国語を書くときに受ける韓国語の影響の方がより強く、韓国語を書くときには中国語からの影響は少なかった。これは、華僑生徒の母語が韓国語になっていることを意味している。韓国語を書くときにいくつか問題点があるものの、中国語を書くときのように文法と語順の間違いはほとんどなかった。

4.1. 韓国語の問題点

まず、華僑生徒の韓国語を書くときの問題点を挙げると、以下のようになる。

①つづりの間違い

華僑生徒の韓国語を書くときに最も多く発生する問題点がこれである。ハングルは表音文字ではあるが、まったく発音通りに書くわけではない。しかし、発音するままに文章を書くなどして、つづりを間違えた例が非常に多かった。

(1) 심심할꺼 같다.→심심할 것 같다.
(面白くなさそう)
(2) 너무 조타.→너무 좋다
(とてもいい)
(3) 매우 덥웠다.→매우 더웠다
(とても暑かった)
(4) 이제 곳 방학이다.→이제 곧 방학이다.
(もうすぐ休みだ)

以上の文章の中で（1）を例に挙げて説明すると、話すときには「심심할꺼」に発音するが、書くときには一般的に「심심할 것」と書く。しかし、そのまま「심심할꺼」で書いている。(2) の文章も同様である。一般的な書き方を矢印の右に書いておいてあるため、比較すれば見て取れると思われる。(3) の文章の「暑い」という意味の韓国語は「덥다」であるが、過去形にすると「더웠다」になるが、「덥웠다」とつづりが間違っている。(4) の「곳」の意味は「ところ」であり、「すぐ」という意味なら「곧」を使うべきである。「곳」と「곧」は発音が同じであるため間違ったと思われる。

②ネット用語からの影響

現在韓国ではインターネットや携帯電話が普及しており、独特な韓国語の書き方が流行しているが、華僑生徒はその書き方をそのまま作文に書く例が多く見られた。その例を挙げると以下のようなものがある。

(1) 싶었거던요.（したかったです）
(2) 엄마도 허락하시구 해서요.（お母さんも承諾したからです）
(3) 울 가족에 대해서 말해 보겠다.（私の家族に対して言ってみます）
(4) 감동 먹었다.（感動した）

インターネットや携帯のメールでは、(1) のように「거든요」を「거던요」で使う場合が多い。(2) の文章の「허락하시고」の「고」もネット上では「구」でよく書かれる。また、(3) の「울」は「우리」の短縮語として、「感動した」は「감동 먹었다（感動を食べた）」という表現で使うことも多い。

③敬語使用の間違い

多くはないが、尊敬語や謙譲語の使い方に問題がある文章もあった。例えば、「전 그걸 재미있게 보았다（私はそれを面白く見た）」は、「～다」で終わる文章は「私」の謙譲語の「전」を使わずに、「나」を使うのが普通である。また、「그 친구는 가셨다（その友達は帰った）」も自分の友達を指している場合は、尊敬語の「가셨다」は使わない。もし尊敬語の「가셨다」を使う場合は「친구」ではなく、尊敬語の「친구분」を使うべきである。

④中国語からの影響

少ない例ではあるが、韓国語を書くときに中国語の影響を受け、中国語の単語を韓国語にそのまま訳して使う文章も見られた。

(1) 숙제를 썼다.→숙제를 했다.
（宿題を書いた）
(2) 놀이를 놀았다.→놀이를 했다.
（遊びを遊んだ）
(3) 영어대화 능력이 올라간다며 좋아했다.→영어대화 실력이 는다면 좋아했다.
（英語の能力が上がると喜んでいた）

(1) の場合、中国語の「寫作業（宿題をする）」の「寫」をそのまま訳して「쓰다」という動詞を使用したが、韓国語では宿題を「する」という動詞を使う。つまり、「숙제를 썼다」ではなく「하다」という動詞を使い、「숙제를 했다」の方が一般的である。また、(2) の場合も、中国語の「玩遊戯（遊ぶ）」の「玩」を訳して「놀다」という動詞にしたが、韓国語では「하다（する）」という動詞になる。(3) は「提高英文會話能力（英会話の実力が上がる）」という意味から「영어대화 능력이 올라간다」になったと思われるが、「영어대화 실력이 는다」が普通である。しかし、この例は非常に少なく、66本の作文の中で、5本しかこうした間違いをおこしていなかった。しかも、文章で数えると7個しかなかった。

以上の問題点以外にも語尾が「～다（～る）」と「～습니다（～ます）」で終わる文章が混ざっているのも見られた。

韓国語を書くときに華僑生徒が発生する①から③は華僑生徒に限った問題ではなく、韓国人生徒にも生じている問題である。つまり、これは正書法の問題であるが、その主な原因は小学校から韓国語の授業時間が非常に少なかったため、韓国語を書く訓練を受ける機会が少なかったからであろう。

4.2 中国語の問題点

華僑生徒の中国語の文章は、韓国語のものより、多くの問題点を抱えているため、より詳しくみていきたい。中1の11作文と中2の10作文の文章数をそれぞれ算出し、そのなかで各問題点が占める割合を〈表6〉のように計算してみた[17]。

表6 中国語作文の各問題点の占める割合

問題点	中国語の問題			韓国語からの影響		合計	文章数
	誤字	文法	単語	文法	単語		
中1	35	22	7	3	11	78	196
割合	17.86%	11.22%	3.57%	1.53%	5.61%	39.80%	－
中2	19	15	10	1	6	51	274
割合	6.93%	5.47%	3.65%	0.36%	2.19%	18.61%	－

①中国語の問題

華僑生徒が中国語を書くとき生じる問題点は大きく分けて、中国語自体の問

題点と韓国語からの影響による問題点という二つがある。前者の中で最も多いのが「誤字の問題」である。これは華僑生徒が中国語作文を書くときに最も多かった問題点でもあり、中1は17.86%、中2は6.93%と、両学年とも一位である。「誤字の問題点」を例に挙げると、「幾小時後（何時間後）」が「幾小時候」になったり、「時候（～とき）」が「時後」、「一直（ずっと）」が「一只」、「慢慢看（ゆっくり見る）」が「漫漫看」、「吸煙（煙草を吸う）」が「氣煙」、「被媽媽罵（母に怒られる）」が「被媽媽嗎」になっており、同じ発音で違う意味を表す字を間違えて書く場合が多かった。

次に多いのが「文法の間違い」であった。中国語として違和感がある場合や意味が通じない文章はこれに入れて計算した。中1の場合は全体文章数の11.22%、中2は5.47%がこの問題点である。その例を挙げると以下のようなものがある。

(1) 我覺得，這個星期覺得很高興也很快樂。（私が思うに、今週はとてもうれしく、また、楽しかったと思う）
(2) 還有上課老師講的好，所以上課時好。（また、授業中先生は講義がいいので、授業の時がいい）
(3) 有不好的有功課太難了。（悪いのがあるのは、勉強が難しい）
(4) 我升上國中以後，穿校服像中學一樣，是想像的長大了。（私は中学校に上がってから、制服を着ると中学校らしく成長したと想像した）

(1) は「覺得（思う・感じる）」が二回重なった文章になっている。普通は、「覺得」を一回使って「我覺得這個星期很高興也很快樂」である。(2) の「上課老師講的好」は「老師講課講的很好」が一般的である。また、「上課時好」は、作者の意味が読み取れないが、おそらく「我喜歡上課（私は授業を受けるのが好きだ）」ではないだろうか。(3) も「有（ある・いる）」が二回重複されており、最初の「有」は必要ない。(4) の文章は意味がよく理解できなかったが、「私は中学校に上がってから、制服を着ると中学生らしく、成長したと思った」という意味だろう。こうした意味を中国語で書くと「升上國中，我把校服穿起來就像個中學生的樣子，感覺自己長大了」である。

三つ目に多いのは「単語の間違い」である。全体文章数のなか、中1は3.57%、中2は3.65%を占めている。その誤用の例を挙げると以下のようなものがある。

(1) 我穿的很整又乾淨。（私はきちんときれいに服を着た）
(2) 我上中學以後功課變退了。（私は中学校に上がってから成績が退くようになった）

(1) 文章は「整」ではなく「整齊（きちんと）」の方が一般的である。また (2) の文章は「變退了（退くようになった）」ではなく、「退步了（落ちた）」あるいは「變不好了（悪くなった）」が普通である。

②韓国語からの影響

韓国語の影響からくる問題点は、全体的に中国語自体の問題点より発生の割合が低かった。まずは「文法の間違い」をあげることができる。中国語の語順は韓国語と違って、動詞が目的語の前に来るが、韓国語はその反対である。例えば、「ご飯を食べる」と書く場合、中国語は動詞「吃」が目的語「飯」の前にきて「吃飯」になる。しかし、韓国語は動詞「먹다」が目的語「밥」の後ろにくるため「밥을 먹다」になる。このように、中国語の語順は韓国語と異なっているが、華僑生徒の作文の中では、韓国語の語順で中国語を書く例が見られた。こうした「文法の間違い」が占める割合は、中1の場合は全体文章数の1.53%であり、中2は0.36%であった。

(1) 放假作業也沒有。→也沒有放假作業。
（休みに宿題もない）
(2) 那時同學都還不太認識。→那時都還不太認識同學。
（そのときはまだ同級生を知らなかった）
(3) 住宿很有趣，而且老師和每天運動。→住宿很有趣，而且和老師每天運動。
（寄宿舎はとても楽しく、先生とも毎日運動ができる）

以上の文章の一般的な書き方を矢印の右に書いておいた。(1) の文章では、目的語「放假作業」を動詞「沒有」の後ろにもってくるのが適切である。(2) の文章も同様に目的語「同學」を動詞「認識」の後ろにくるのである。(3) の文章は韓国語の語順で「和（と）」を書いているが、中国語にすると「和」は「老師（先生）」の前にくるのが普通である。

第二の問題点は、「単語の間違い」である。これは韓国語の単語を訳してそのまま中国語の単語として使用する問題である。この問題点は「文法の間違い」

より多く、中1は5.56%、中2は2.19%である。

(1) 上學給很多幸福。(学校に行くことは私に幸せをくれる)
(2) 過了幾天老師給我們校服。(数日後、先生が私たちに制服をくれた)
(3) 幸福不是來的，是自己造的。(幸せは来るのではなく、自分が作るものだ)
(4) 我住在外國人天地梨泰院，是人多複雜的地方。(私は外国人天地の梨泰院という人が多く複雑なところに住んでいる)
(5) 我是住校生所以很難看家族的臉。(私は寄宿生であるために家族の顔がなかなか見られない)

(1) と (2) は韓国語の「주다 (あげる)」に当たる「給」を使ったのであるが、(1) の場合は「帶給 (もたらす)」、(2) の場合は「發了 (配る)」が適当である。(3) も韓国語の「오다 (来る)」「만들다 (作る)」をそのまま訳して「來」「造」を使用したようであるが、「找上來 (訪れる)」と「創造 (作る)」の方が適切である。(4) の「複雜」も韓国語の「복잡하다 (混雑する)」という意味でそのまま使用したが、中国語では「複雜」というのは複雑という意味であり、「混雜」の意味で使う場合は「雜亂」になる。(5) も「보다 (見る)」＝「看」、「가족 (家族)」＝「家族」で使用しているが、「看家族的臉」ではなく「看到家人的臉」の方が普通である。

華僑生徒が中国語を書くときに生じる問題点を見てみると、中国語自体の問題点が韓国語から受けた影響より占める割合が高かった。これは、韓国語を書くときと同様に正書法の問題である。しかし、韓国語を書くときには違和感のある文章や意味が通じない文章は少なく、ほとんどがつづりの問題であった。また、中国語を書くときに韓国語から受ける「文法の間違い」と「単語の間違い」を合わせると、中1が7.13%、中2が2.55%である。これは、韓国語を書くときに中国語の影響から生じる問題の割合より高い。さらに、韓国語を書くときには中国語から受ける影響は「単語」のみで、「文法の間違い」はほとんど発生していない。

これらの問題点から、華僑生徒の母語が韓国語になっていることが理解できる。しかし、中国語の教育が完全に機能していないわけではない。〈表6〉の中1の問題点の発生数と中2のものとを比較すると、中2の割合が少ないことが分かる。これは、教育によって中国語能力が上昇したものと考えられる[18]。

しかし、多くの生徒において、韓国語が優位言語になっており、中国語は学校で学ぶ立場になっているのも確かな事実のようである。

5. 韓国語の「母語化」

ここで、華僑生徒において韓国語の「母語化」が進行している状況をもう少し詳しくみてみたい。また、その原因をも考察してみよう。

5.1. 韓国語の「母語化」の現状

韓国華僑生徒は、二つの言語を使用できるものの、二つの言語ともに完璧に使うことができない。韓国語の使用状況は、話す能力はほぼ問題なく、読む能力もそれほどの問題はないと思われるが、書く能力は前述したような問題点を抱えている。一方、中国語については、話す・読む・書く能力ともにレベルが低いという大きな問題を抱えている。

蕭相譲教務主任によると、今の生徒は学校でもほとんど韓国語を使用している。生徒たちは韓国語で話すことに慣れており、それは一種の習慣であるという[19]。学校側はできるだけ中国語を使わせようとしているが、その指導は非常に困難であるという。実際、「韓国漢城華僑中学」では、中国語能力を強化しようと、中国語の会話教材を編集し、毎朝授業がはじまる前の8時20分から35分まで、中国語学習の時間を設けたが、効果はさほどなかった[20]。また、毎年開催する中国語のスピーチ大会も大きな効果はない。生徒の中国語を書く場を設けるために、1994年8月から中国語の校内雑誌『漢中作文園地』を年3回発行していたが、現在は年2回に減少した。その主な内容は生徒の作文であるが、生徒の投稿意欲は高くないそうである[21]。

一方、権相基韓国語教師によると、韓国語の校内雑誌の『한글마당 (ハングル広場)』への生徒の投稿率は高く、広い範囲の生徒が投稿してくるという[22]。ちなみに『한글마당』は、1995年8月に創刊され、最初は一学期一回発行されていたが、現在は年4回発行されている。『한글마당』は、教師と生徒により編集・発行されており、その内容は『漢中作文園地』と同様に、生徒の作文やエッセイが中心である。

2002年2月、綛谷智雄は「韓国漢城華僑中学」の高校生133名を対象に言語

状況の調査を行った[23]。「中国語と韓国語のどちらがよくできるのか」という質問に対して、話すときには、「韓国語」が48%、「ほぼ同じ」が41%、「中国語」が10%を占めた。聞くときには、「ほぼ同じ」が56%、「韓国語」が29%、「中国語」が14%であった。読むときには、「韓国語」が48%、「ほぼ同じ」が37%、「中国語」が14%であった。書くときには、「韓国語」が50%、「ほぼ同じ」が34%、「中国語」が15%であった。このように、話す・聞く・読む・書く能力において、韓国語が中国語よりすべて優位を占めていた。

また、「相手とどちらの言語で会話するのか」という質問に対して、父親とは、「中国語と韓国語両方」が44%、「韓国語」が17%、「中国語」が17%であった。母親とは、「中国語と韓国語両方」が40%、「韓国語」が33%、「中国語」が20%であった。兄弟とは、「中国語と韓国語両方」が65%、「韓国語」が32%、「中国語」が8%であった。華僑の友達とは、「中国語と韓国語両方」が65%、「韓国語」が31%、「中国語」が4%であった。この回答からすると、中国語と韓国語両方で会話する場合が最も多く、次が韓国語であり、中国語の比率が最も低かった。これは、家庭や学校でも中国語より韓国語をよく使用することを意味している。

5.2. 韓国語の「母語化」の原因

現在の若い世代の韓国華僑は、第二世代と同様に小・中・高等の華僑学校に通い、主に中国語による授業を受けている。しかし、その中国語能力は第二世代と比べ、非常に低い。従って、中国語能力が低下し、韓国語の「母語化」が進んだ原因は学校教育以外の以下のような要素から探らねばならないであろう。

①家庭における言語環境の変化

韓国華僑の家庭における言語環境に変化をもたらしたのは、韓国人との結婚である。1980年代の朴銀瓊の研究によると、当時の約10%の華僑が韓国人と結婚しており、華僑中学（中等部と高等部を合わせて）にも母親が韓国人である生徒は約10%であった[24]。

しかし、近年韓国華僑と韓国人との結婚が増加しており、とりわけ華僑男性と韓国人女性との結婚が増加の傾向にある。綛谷智雄の調査によると、華僑女性と韓国人男性の結婚数は、1994年には136組、1995年には114組、1996年には134組であった[25]。一方、華僑男性と韓国人女性との結婚は、1994年には87組、1995年には97組、1996年には110組と増加している。

表7 「韓国漢城華僑中学」における韓国国籍の母親数（2004. 9現在）

学　年	生徒数	韓国籍母親数	割合
高等部3年	116	44	37.9%
高等部2年	114	36	31.6%
高等部1年	105	36	34.3%
合　計	335	116	34.6%
中等部3年	89	32	36.0%
中等部2年	108	35	32.4%
中等部1年	101	41	40.6%
合　計	298	108	36.2%
高等部・中等部合計	633	224	35.4%

出所：韓国漢城華僑中学の譚道経韓国語教師の提供資料（韓国語資料、2004年9月、筆者が同校を訪問し入手）
註：この表の高等部と中等部の生徒数の合計が〈表2〉の631人より二人多いが、その数字の信頼度は低くないと思われる。

「韓国漢城華僑中学」においても母親が韓国人である生徒の数が増加している。2004年現在、〈表7〉の通り、高等部においては34.6%、中等部においては36.2%の生徒の母親が韓国人である。

韓国人の母親の増加は、家庭環境に変化をもたらした。特に言語環境に大きな影響を及ぼした。生まれる子どもの母語、つまり母のことばが韓国語に変化したのである。家のなかで父親は母親のために韓国語で会話し、家庭内の主な使用言語が韓国語になっていったのである。こうした家庭で育てられた華僑の子どもは、家の中で主に韓国語で会話をするようになる。母語が韓国語になったため、学校での華僑の友達との会話も韓国語になりやすい。中国語と韓国語を混用する場合も、韓国語の比率が高いのではないだろうか。権相基韓国語教師によると、生徒たちが中国語と韓国語を混用する場合、「国文作業 다 했어？（国文の宿題は終ったの？）」のように、名詞は中国語を使い、述語・助詞は韓国語を使うという[26]。また、「～しよう」という意味の中国語の「～吧」という語尾に代わって、韓国語の「～자」をつけ、「走자（行こう）」、「吃자（食べよう）」のように話すことも多い[27]。

このように、韓国人女性との結婚は、家庭内の言語環境の変化をもたらし、華僑生徒の母語が韓国語になる一因として働いたと考えられる。

②生活環境の変化

韓国華僑生徒において韓国語が「母語化」した二つ目の原因は、生活環境の変化であると考えられる。その変化をもたらした要因として、まず、居住形態の変化を挙げることができる。

具孝慶・金信子の調査によると、1962年ソウルにおける華僑人口は7,136人であったが、中区に31%、鍾路区に17%、永登浦区に15%、西大門区に13%と、76%の人口がこれらの4区に集中していた[28]。しかし、1960年代末からはじまったソウルの都市開発計画により、華僑の店や家が多く集まっている地域に道路がつくられるなどで、韓国華僑の集中居住地は分散するようになる。1986年の調査によると、当時の韓国華僑の人口は11,416人であり、韓国華僑人口が最も集中されていた中区は19%まで減少した[29]。そのほか、西大門区が14%、麻浦区が10%、鍾路区が8%、永登浦区が7%となった。これらの5区を合計しても58%になるのみである。実際、1960年代まで存在した中区興天洞の中華街、鍾路区琵琶洞の中華街は姿を消し、現在は中区明洞において華僑経営の店が少し残っているのみである[30]。

韓国華僑の居住地域が集中していた時期には、韓国華僑のコミュニティができやすく、華僑同士の接触が多くなる反面、韓国人との接触は少なくなる。こうしたコミュニティの形成により中国語環境がつくられ、中国語を主要使用言語とする華僑が育ちやすくなる。

韓国華僑が分散して居住するようになってから、華僑同士の接触は減少した一方、韓国人との接触は増加していった。つまり、華僑二世に比べ、三・四世は居住地が分散し、韓国人に囲まれた生活によって韓国人との接触が増加した。韓国人との関係が密接になり、また、行動の範囲を広くなるにつれ、華僑が韓国語を使用する機会が増加した。

韓国華僑の生活環境の変化をもたらした二つ目の要因として、メディアの影響を挙げることができよう。韓国の経済発展によりテレビや新聞等のメディアが発達し、華僑二世が育った環境と比べ、若い世代は韓国語にさらされる機会がより多くなった。テレビなどのメディアが身近な存在となり、そこからあふれ出る韓国語に影響を受けやすくなった[31]。その上、若い世代はメディアから伝播する流行文化に非常に敏感であり、韓国のアイドルに夢中になりやすい。また、流行文化や流行語に反応しやすく、真似しがちである。従って、メディアの発達により、韓国語が自然と身につきやすい環境が出来上がった。

最後に、携帯電話やパソコンの普及による影響が挙げられる。韓国では携帯電話とパソコンの普及率は非常に高い。韓国では、中国語のソフトは手に入り難く、華僑生徒にとって、打ち方も韓国語より複雑であるため、覚えにくい。それゆえ、韓国語のソフトを使用し、韓国語で入力する華僑生徒がほとんどである。また、パソコンの普及に伴ってインターネットも普及したが、ネット上で中国語を使用する機会はそれほど多くない。さらに、近年携帯電話が普及し、そのメールはハングルでのみ入力できるため、若い世代はハングルを書く機会がより増加した。若い世代はほとんどの情報を韓国語から収集しており、それは情報社会である現在に生きる華僑の必然的結果かもしれない。

6. おわりに

華僑の若い世代の言語の現地化現象は、韓国に限った問題ではない。華僑社会であるならどこも抱えている問題であるだろう。韓国華僑社会の「韓国化」が本格的に進むようになったのは1990年代半ばからであり、他の華僑社会の現地化が訪れた時期と比べると、やや遅いように思われる。従って、今まで華僑の父母が子どもを華僑学校に通わせていた最も大きな理由は、「中国人」は「中国」の教育を受け、「中国語」を話すべきであるという考えからであった[32]。つまり、華僑の父母が華僑学校を選択する主な根拠は民族意識に基づいていた。しかし、「韓国化」が進んでいる韓国華僑社会で、いつまでそれが選択の基準になり続けるかは不明確である。

小学校から高校まで一貫した教育を行っている日本の「東京中華学校」の場合は、創立初期の教育目標は華僑子弟に民族意識を培うための中国語教育の実施であった[33]。しかし、華僑子弟は減少する一方、ニューカマーの中国人の子ども、及び日本人や他の外国籍の子どもが増加するなど、生徒の背景が変化しつつある[34]。華僑生徒の進路も日本の大学を希望するものが大多数を占め、教育課程もそれに合わせ、日本語の教育も重視している。それのみならず、国際的な人材育成のために小学校1年生から英語教育を実施している。現在は中国語のみならず、日本語、英語能力を持つ国際的人材育成にその目標を置いている。郭東栄校長によると、華僑の父母が子どもを華僑学校に行かせる最大の理由は複数の言語を身につけさせるためであるという[35]。

このように「東京中華学校」の場合は、華僑に民族意識を植付けるための学校から言語教育を中心とする学校に変化している。「韓国漢城華僑中学」は、今まで華僑の民族意識の養成に力を注いできたといえるが、これからは「東京中華学校」のように、多言語教育が中心になっていくのではないだろうか。韓国華僑社会が転換期を迎えている現在、「韓国漢城華僑中学」も変化の只中にいる。新しい変化に対応するためには、まず、今まで韓国華僑社会に存在してきた華

僑の母語は中国語であるべきだという固定観念を切り離す必要がある。本稿で見てきたように華僑の子どもの母語はすでに韓国語になっている。華僑学校は今まで、入学当初から中国語ができるということを前提に学校の教育課程を編成してきた。しかし、これからは、華僑生徒の母語が韓国語になっていることを勘案して、中国語と韓国語が両立できる二言語教育プログラムに再編していくことが最も重要な課題として考えられる。

華僑二世の中国語能力が高いレベルで維持できたのは、家庭環境・生活環境と華僑学校教育がその役割を果たしたからであろう。しかし、今後、韓国華僑社会の「韓国化」は止められない流れであり、家庭環境と生活環境の「韓国化」はますます進行すると考えられる。そのなかで、いかにして若い世代の中国語を維持していくかを考えると、中国語教育機関としての、華僑学校の役割がますます重要になるだろう。そのような意味で、華僑学校の教育が次世代華僑の中国語維持の核心的な役割を担うことになると思われる。

[注]

1 華僑人口は、居住・永住・永久配偶者という滞在資格をもつ中華民国（台湾）国籍者の合計である（出入国管理局『出入国管理統計年報、2002』法務部、2003年（ソウル）、272～273頁）。なお、2002年から韓国で初めて永住権制度を導入され、2002年度の出入国管理統計年報の「国籍及び滞留資格別登録外国人」には、永住・永久配偶者という滞在資格が増加された。永住権を取得するには、5年以上持続的に韓国に居住し、3千万ウォン以上の財産証明と、身元保証人が必要である。「居住」資格が5年ごとに居住期限の延長が必要なのに対し、永住権は居住期限の制限はない。しかし、それ以外には、大きなメリットはないといわれている。ちなみに、韓国華僑人口のなか、居住者は15,652人、永住者は5,958人、永久配偶者は19人である。

2 韓国漢城華僑中学の歴史に関しては、韓華学報編集室「漢城華僑中学簡史」『韓華学報』、創刊号、2001年8月（ソウル：中国語）、または、韓国漢城華僑中学「校史」『韓国漢城華僑中学第九十三学年度概況』2004年（ソウル：中国語）参照。

3 2002年からは「中華人民共和国」の国籍者が見られるようになるが、中華人民共和国と韓国が国交を樹立したのは1992年であり、それまでは中華人民共和国の者は韓国内に居住することはできなかった。つまり、1992年以前の韓国には、中華人民共和国国籍の就学年齢の児童・生徒はいなかった。中華人民共和国からの華僑は既存の韓国華僑と連帯関係が強くないため、本稿では、中華人民共和国の国籍者は、韓国華僑の範囲から排除することにした。

4 1986年の「その他」は、韓国人である可能性が高い。韓国政府が韓国人生徒の外国人学校への就学を禁止したため、韓国人生徒の数を「その他」と記した可能性が高いと思われる。

5 1974年度の前期を基準にした数値である。（韓国漢城華僑中学「第九十三学年度漢城華僑中学歴年学生人数統計表」『韓国漢城華僑中学第九十三学年度概況』、2004年、26頁。（ソウル：中国語）

6 「第九十三学年度漢城華僑中学歴年学生人数統計表」（前期基準）によると、1978年の生徒数の合計は2,297人、1986年は1,308人、2000年は856人、2002年は720人、2004年は629人である。これは、〈表2〉の生徒数の合計と少々違っているが、統計した時期が異なるためであると考えられる。

7 韓国漢城華僑中学「漢城華僑中学高中部各班人数統計表」・「漢城華僑中学初中部各班人数統計表」『韓国漢城華僑中学第中十三学年度概況』、2004年、29頁、30頁。

8 戦後韓国における華僑教育の歴史と教育課程・法的地位などに関しては、王恩美「韓国における華僑学校教育の歴史── 1945年以後を中心に」『華僑華人研究』創刊号、2004年、ですでに論じているため、ここでは、2004年の教育現状に焦点を当てている。なお、「韓国における華僑学校教育の歴史── 1945年以後を中心に」では、「韓国漢城華僑中学」の中等部では「認識台湾」と「郷土芸術活動」の二科目は教えていないと記述したが、今回の調査により「認識台湾」を教えていることが明らかになったので、ここに訂正したい。

9 張兆理『韓国華僑教育』華僑教育叢書編輯委員会、1957年、69頁（台北）。

10 中等部の国文を担当している譚金霞教師に対するインタビュー調査。（2004年9月24日、韓国漢城華僑中学の教務室にて）

11 同前

12 中等部の韓国語を担当している権相基教師に対するインタビュー調査。（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の教務室にて）

13 同前

14 蕭相譲教務主任に対するインタビュー調査。（2004年9月24日、韓国漢城華僑中学の教務処にて）

15 「韓国漢城華僑中学」は、中華民国と同様に9月から新学期が始まるが、韓国の学校は3月から新学期が始まるため、およそ半年の差が生じている。韓国の大学進学希望者は、8月に卒業した後、3月の大学入学まで、約半年の時間が空くため、学校側では正確な統計が取りにくいという。

16 今回取り上げた中国語作文が少ないのは、国文教師により多くの作文を見せてほしいと要求しなかったからである。

17 文章を数える際、「,」と「。」で分けられた文章はすべて、一文章として計算した。

18 現在、「韓国漢城華僑中学」の中等部では、「優秀班」1クラスと「普通班」2クラスに分かれて運営されている。今回分析対象とした中国語作文は、中1の場合は「普通班」のものであり、中2は「優秀班」のである。それゆえ、中1の問題点発生数が多く、中2がより少ないのは、生徒の質も関係している可能性が高い。しかし、中国語教育によって、中国語が上昇するのも否定できない。

19 筆者が2004年9月、「韓国漢城華僑中学」を訪問した際、休みの時間に生徒たちの会話の様子をうかがうことができた。生徒同士ではほとんど韓国語で会話をしており、教師に話をかけるときも最初は中国語からはじまるが、だんだん韓国語に替わっていった。譚金霞国文教師によると、最初は中国語がよくできる生徒も、他の生徒と交わる中で、徐々に韓国語を主に

使うようになるそうである。また、韓国語で会話しないと仲間はずれにされる場合もあるという。

20 孫樹義校長とのインタビュー調査（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の校長室にて）

21 中等部の国文を担当している譚金霞教師とのインタビュー調査（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の教務室にて）。

22 中等部の韓国語を担当している權相基教師とのインタビュー調査（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の教務室にて）。

23 綛谷智雄「設問調査를 통해서 본 韓國華僑青少年의 文化實體」『韓華學報』第2号、2003年7月（ソウル）。

24 調査の時期は明らかにしていないが執筆したのが1984年であるため、その前に行った調査であると考えられる。（朴銀瓊『한국화교의 種族性』、韓國研究院、1986年、155、203頁）

25 綛谷智雄「在韓華僑の生活世界―在韓華僑エスニシティの形成、維持、変化」『アジア研究』、第44巻2号、1998年、126頁。

26 中等部の韓国語を担当している權相基教師に対するインタビュー調査（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の教務室にて）。

27 朴銀瓊『한국화교의 種族性』、前掲、205頁。ちなみに、筆者も1986年から1992年まで「韓国漢城華僑中学」に通っていたが、よく中国語に韓国語の語尾や助詞を混ぜて使用していた。

28 具孝慶・金信子「在韓華僑의 實態」『緑友會報』第5号、1963年、39頁。

29 南知淑「서울市 華僑의 地理學的 考察（1882年～1987年）」梨花女子大學碩士論文、1987年、58～61頁。

30 1960年代のソウルにおける中華街に関しては、具孝慶・金信子「在韓華僑의 實態」、前掲、41～43頁、参照。その後、中華街の変化に関しては、朴銀瓊『한국화교의 種族性』、前掲、246～254頁、参照。

31 綛谷智雄「在韓華僑の生活世界―在韓華僑エスニシティの形成、維持、変化」、前掲、126頁。

32 孫樹義校長に対するインタビュー調査（2004年9月30日、韓国漢城華僑中学の校長室にて）

33 東京中華学校『東華』、9巻、1999年6月、25頁。

34 **東京中華学校全校生の国籍表（2000年）**

（単位：人）

国籍	中華民国	中華人民共和国	日本	マレーシア	アメリカ	その他	計
人数	140	73	119	2	5	8	347
割合	40.4%	21%	34.3%	4.3%			100%

出所：郭東栄「東京中華学校簡介」（2000,6,27）（中国語資料、2000年7月同校を訪問し入手）

35 郭東栄校長に対するインタビュー調査（2000年7月、東京中華学校の校長室にて）

ヨーロッパの多言語主義と少数言語

「オック語」の事例から

佐野 直子

私たちは、読者が誰もいないかもしれなくても、
喜びをもってプロヴァンス語で書いている。(Louis Bayle, 1968)

2003年10月3日、フランス文化省の「フランスとフランスの諸言語総代表部〔Délégation Générale à la Langue Française et aux Langues de France, DGLFLF〕」代表部長セルキリーニ氏のよびかけにより、「フランスの諸言語」の活動家たち約1000人がパリに集結して、「フランスの諸言語第一回国民会議」が開催された。中央政府と諸言語の活動家の意見交換や活動家たちの交流の促進がその目的である。しかし、そこで確認されたことは、「フランスの諸言語」の序列化・階層化と、少数言語間の利害の対立であった。

参加者が会議場で主張したところによれば、「フランスの諸言語」には、バカロレアの試験科目として認められ、自治体の財政補助などを受けて教育・メディア・さらには研究所などのハードが整備されている恵まれた「高位の」言語〔langues “hautes”〕（コルソウ語、ブレイス語、バスク語、カタルーニャ語など）と、バカロレアの科目として選択できず、さまざまな差別を受けている「低位の」言語〔langues “basses”〕があるという（Ministère de la culture et de la communication, 2003, p.43）。このため、成功している「地域言語」による発表・報告に対する参加者の反応は冷めたものになりがちであった。会場からはそれぞれの現状を訴える主張があいつぎ、互いの主張が対立して、会場が騒然とする場面もあった。たとえば、「地域言語」として言語政策の「地方分権」を訴える側に対して、フランス手話など、「領域」をもたず、話者がフランス中に分散している言語の活動家による「少数言語問題の地域化」に対する異議申し立てがある。また、あることばを「一つの言語」と公的に認めてしまえば、別の言語の存在を否定す